

旅する工具屋



第十一話：極彩色の貧困．混沌に飛び込んで見えた景色．

駐在の任期を終え日本に帰任した後も、私の足と心は旅へと向かい続けています。これまでほぼ行ったことが無いアジアへの進出は、私に全く新しい世界観や価値観を授けてくれました。定番のタイも、煌くシンガポールも、ネパールも、カンボジアも、個々に取り上げたいところですが、ここで旅人の登竜門(?)として名高いインドを外すことはできません。

出張でも旅行でも「別格」な位置に君臨するこの国は、その評価も大きく割れることで有名です。ハマった人と二度と行きたくない人の差は、インドと聴いた瞬間の眼の色ではっきりと分かる程です。そして厄介なことに、旅好きの中で後者は未熟な「インド敗退組」の様な位置にランク付けされます。不幸にも私の周りにはこのカースト下位の人が多く、フライトまでに否定的な情報が幾度も刷り込まれました。

上海で乗り換えデリーに到着したのは深夜、空港の自動ドアが開いた瞬間は忘れられません。匂いというより、手ですくって取れそうな濃い空気が全身を包んだのです。滞在中は屋内屋外問わず強制的にこの空気の下で過ごす事になるのですが、この時点で既に印象の二極化は進むのではないのでしょうか。幸い「おおっ」と思う程度だった私は、その空気を楽しみながら電車で移動しました。想像以上に近代的…というか普通な地下鉄に驚きましたがホテルに無事到着。明日から自分は何を見て何を思うのか、期待と不安を感じながら仮眠をとりました。

翌朝は日の出とほぼ同時にタクシーで駅まで移動しました。渋滞もなく予定より30分も早く駅に着いた私はいよいよインドのローカル線に挑戦します。先発の電車を数本観察して、電光掲示板の情報は全くアテにならないこと、到着10分前にホームに貼られる長い紙を見て自分の名前を懸命探すしかないことが分かりました。幾本もあるホームを見渡せる眺めの良い場所に立ち、駅員が紙を貼った場所に駆け足で向かうこと数回、自分の名前を見つけて急いで乗車。私の席は縄のはしごをよじ登って入る窓無し2階席でした。



インドの電車を攻略した！とホッとしたのも束の間、停車する駅名のアナウンスも無ければ駅の看板も申し訳程度のサイズで、窓無し2階の私の席からは見えない現実と戦う時間が訪れます。電車は度々止まり、駅数を数える作戦も徒労に終わりました。降りるのは、乗るよりも難しい…さてどうしようか、と困っていた私を助けてくれたのは突然話しかけてきた浮浪者風のインド人でした。

彼は少し英語を話し、私が降りたい駅までのおおよその時間と旅の幸運を願ってくれました。乗車券を持っているのかどうかすら怪しく思う凄まじい身なりだったので、情報の対価としてお金を要求されるのだと思いました。しかし話が終わると彼は意外にもスタスタと私の前から歩いて去ってしまったのです。

この時は「変わってるけど、いい人だったな」程度でしたが、いざ電車を降り街へ繰り出して驚きました。立ち止まれば話しかけられ、目が合えば話しかけられ、人が人を呼びすぐに輪ができあがるのです。もちろん駅の近くや観光地だと商売が目的なので無視もしますが、ふとした道端や交差点では土埃を浴びながら他愛のない会話を頻繁にしました。楽しい話ができた後は、別れを告げて次の目的地に歩み出すのが惜しまれたほどです。

人々に囲まれ、見渡して気付いたのですが、誰もが赤・黄・青・ピンク・紫といったカラフルな発色の強い服を着ています。街並みやふと眼に留る細部から、強烈な貧しさが彼らを巣食っていることが間違いなく分かりました。しかし、彼らから発せられるエネルギーと極彩色の風景には、それを打ち消してなお余りあるパワーがありました。

出発前に聞いたネガティブな情報の多くは「急に～されそうになった」とか「一方的に、無理矢理～」といったものがほとんどでした。恐らくツアーや出張などの移動中に、一瞬だけ本当のローカルと接触した時に起きたショックが被害者的な視点で処理されたものだとは今では個人的に考えています。立ち止まり、じっくり聞いて自分の意見を述べて相手との対話もできていたなら、印象は変わっていたはずだと思うのです。

私なりにインドがほかの国と明らかに違うと感じた点は1つの風景に映る状況の複雑さです。他の国では栄えていれば栄えていて、寂れた所はひたすらに寂れています。しかしインドでは寂れた中に繁栄があり、その中にも栄えようとする所と廃れ行く所がありました。歴史の縮図を見ているようで、人間が「なぜ・何をして・どうなったのか」が一目に飛び込んできます。この状況に身を委ねられるか、混乱し嫌悪するのか、そこが実りある旅の思い出とトラウマを隔てる分水嶺ではないでしょうか。



刺激に満ちたインドの日々はあっという間に過ぎ、最終日が訪れました。着回したパーカー(日本で部屋着として長年使い古した)は最後に捨てるつもりでいましたが、ふと手に取った時にあの濃密な匂いがしっかりと染みついていることに気付きました。ゴミ箱に投げ込むことを惜しく感じ、道端にいた物乞いの方に差し出すと、満面の笑みで緑色のパーカーを手に。あの鮮やかな世界に私の色が加わったことはどこか誇らしく、満ち足りた気持ちで空港へと向かいました。

インドは汚いのかもしれません、臭いのかもしれませんし、危ないのかもしれません。では何故、これほどまでに心惹かれるのでしょうか？それが知りたいからこそ、私は次の旅に向かうのでしょうか。

文：ペンネーム 17chandler